



Title	関西若年層における間投助詞の使用実態：「サ」と「ナ」の機能に注目して
Author(s)	芝本, 彩乃
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2022, 18, p. 98-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86407
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関西若年層における間投助詞の使用実態

―「サ」と「ナ」の機能に注目して―

芝本 彩乃

【要旨】

関西若年層では、間投助詞の使用において東京語形「サ(一)」と方言形「ナ(一)」の両方が見られる。伝統的な関西方言で用いられてきた間投助詞はナであるが、先行研究によって1990年代の関西若年層においてサの受容が見られることが指摘された。しかし、2020年現在の関西若年層の会話を観察すると、1990年代に指摘されている間投助詞の使用実態から更に変化が見られる。また、使用実態に大きく影響を与えると考えられる、間投助詞サに対して若者が抱いている印象にも違いが認められる。本稿では、1990年代との対比によって、現在の関西若年層の間投助詞サ・ナの使用実態を明らかにした。結果として、現在の関西若年層ではサが中心的に用いられ、ターン維持の目的で連続的に使用される例が多いこと、ナは「言い終わり」や「話題の切り出し」部分に偏って出現しやすいこと、サとナに異なるはたらきが見られることなどを指摘した。また、使用意識の面から、サがデフォルトの間投助詞として認識されていることを示した。

【キーワード】 間投助詞、ターン維持、言い終わり、話題の切り出し、サとナ

1. はじめに

関西の若年層では、間投助詞の使用において東京語形「サ(一)」と方言形「ナ(一)」の両方が見られる。

(1) MF1: 今日サー、1か月ぶりくらいに朝バイト入ってんやん。 [M1]¹⁾

(2) PM6: そうこの前ナ、チーズタッカルビ作ってん。 [P5]

元来、間投助詞「サ(一)」という形式は関西方言において使用されていなかった。しかし、高木(2000)は1990年代の関西若年層においてサーの使用が見られることを指摘し、このような若者の東京語形サーの受容について、東京語形サーと方言形ナーの機能分担やイントネーションなどの観点からまとめている。現在の関西若年層においても間投助詞サ²⁾の使用は見られるが、その使用例を見ると高木(2000)とは異なる点も多い。例えば、以下の談話(3)(4)を参照されたい。

●1997年収録の談話

(3) 32B: なんかサー、私 コピーカードナー、当たってん。

33A: 当たったん?

-
- 1) 本稿において、用例末尾の[]内は談話IDまたは引用元を表し、発話者は話者IDで示している。詳細は3.1節を参照。
 - 2) 以下、本稿では「サ」と「サー」の両方を含んでいる。同様に、「ナ」と「ナー」についてもまとめてナと表記する。

34B：当たったっていうかナー、なんか生協からナー、なんかナー、アンケートに答えてくれたらー、(A：うん、) コピーカード進呈っていうやつやってナー、(A：ふん、) んな 送ってきたんやーん。

35A：ンヤー、いいな {笑}

36B：うん、んでナ、105 度のやつ当たってんー。

[高木 (2000) より引用、下線や強調も高木による]

●2020 年収録の談話

(4) PM6：今日ナ 健太³⁾からライン来てサー 数学出来る？ってライン来てサー できるよって言ったらサー これ わかる？って言われて 送られてきたんがサー なんか学期末レポートみたいな 学期末試験みたいな (母親：うん) 送られてきてサー (母親：うん) でなんか 全然わからへんかってんな その 経済学部やからサー 経済学部用語いっぱいみたいな

[M4]

高木は (3) の談話を挙げ、ナを連続して使用する例は多く見られる一方で、サの連続使用は少ないと指摘している。一方 (4) を見ると、むしろサのほうが連続的に使用されている。高木が扱っている談話資料は 1993～1997 年に収録されたものであるため、上掲の例を見てもわかるように、約 25 年経過した現在の関西若年層においては、サの使用実態が更に変化したと考えられる。

また、高木は「関西若年層は『～サー』を東京方言だと認識し、自分では使わないと内省している者もいるが、実際にはサーを用いている」と述べている。しかし、現在では「～サー」という形がかなり浸透したこともあり、東京語形サや、本来伝統的な関西方言形であるナに対して関西若年層が持っている印象や使用意識にも変化が見られるように思う。

そこで本研究では、現在の関西若年層におけるサとナの使用実態・使用意識を改めて検討し、実際の発話において間投助詞がどのような役割を果たしているのかを明らかにする。

以下 2 節で関西の間投助詞についての先行研究を概観し、問題のありかを提示する。3 節では調査方法の検討を行い、4 節では本研究における分析の方法について論じる。5 節以降は実際の調査結果を用いながら、5 節で運用面に関する分析、6 節で意識面に関する分析を行い、7 節で高木 (2000) から現在の使用実態に至るまでの変化について考察する。最後に 8 節で本稿のまとめを述べる。

2. 先行研究と問題のありか

この節では、まず関西方言の伝統的な間投助詞に関する先行研究から、元来関西では間投助詞サの使用が見られなかったことを確認する。次に、高木 (2000) が指摘した、1990 年代の関西若年層における間投助詞サの受容についてまとめる。最後にこれらを踏まえた上で、本稿で問題とする点について述べる。

3) 用例中の人名はいずれも仮名である。

2.1. 関西における伝統的な間投助詞

まずは、関西方言の伝統的な間投助詞について整理する。国立国語研究所（2006）は、全国における方言の文法事象の分布を明らかにする目的で、それぞれの土地の生え抜きの高年層の男性話者に対して、1979～1982 年にかけて面接調査を行い、その結果を『方言文法全国地図』にまとめている。同書第 6 集第 343～348 図によれば、本稿で研究対象とした地域⁴⁾（滋賀、京都、大阪、奈良、兵庫）において用いられる間投助詞は以下のようになっている。

- 滋賀：目上の人や近所の知り合いに対しては「ネー」「ナー」、親しい友達に対しては「ナー」「ノー」を用いる。
- 京都：おおむね「ナー」を用いる。
- 大阪：目上の人や近所の知り合いに対しては「ナ(ー)」、親しい友達に対しては「ナー」「ノー」を用いる。南部では「ヨー」の使用も見られる。
- 奈良：おおむね「ネ(ー)」「ナー」「ノー」を用いる。
- 兵庫：目上の人や近所の知り合いに対しては「ネ(ー)」「ナ(ー)」、親しい友達に対しては「ナ(ー)」「ノー」を用いる。

また、郡（1997a）は、大阪方言における間投助詞について『「ナ・ナー」が一般的であり、丁寧体では『ネ・ネー』もよく使う。泉南では主に『ヨー』を使う』と述べている。いずれにしても、これらの地域に共通して言えることは、間投助詞サの使用が全く見られないということである。

2.2. 東京語形サの受容

高木（2000）は、1990 年代の関西若年層において、間投助詞サが東京のことばと認識されながらも使用されていると述べている。高木によれば、関西若年層の中にはサを「東京弁」「えせ標準語」などと認識している者がおり、彼らにサを用いた例文を与えると「自分は使わない」という内省が得られたとしている。あるいは、「昔は『～でサー』というのが東京方言的で嫌だと思っていたのに、気がつく自分たちも使うようになっていた」と内省した者もいた。いずれにしても、関西では一般にサを東京のことばとする意識があると述べている。一方で、実際にはそのように内省した話者自身が、談話においてサを用いていることを指摘している。

また高木は、1990 年代の関西若年層の間投助詞サの使用実態について、方言形ナと機能を分ける形でサが受容されてきていると分析している。間投助詞サの基本的な機能は、(a) 前置き：ナラティブを始めようとする最初の部分、(b) 話題提示：会話の参加者の自由な発話交換において新たな話題を導入する、(c) 受けつぎ：提出されている話題について発言するためにターンをとる、(d) orientation（方向付け）：ナラティブの途中で補助情報を挿入する、の 4 つであるとし、方言形ナも東京語形サと同じ機能を持つとしている。その上で、

4) 本研究では、高木（2000）との比較を行うため、研究対象地域を高木に合わせて設定している。詳細は 3 節を参照。

ナがサに比べ連続して使用される例が多いことから、サは話題提示や前置きなど話題が新たに導入される部分で用いられ、その話題の中ではナでターンを確保して話を続ける、というように役割を分けて使用されると述べている。

また、このようなサとナの役割分担について、イントネーションに着目して論じている。高木によれば、サはターンを確保し聞き手を割り込ませないタイプの上昇下降調⁵⁾(↑↓)、ナは聞き手うかがいの疑問上昇調(↗)を伴う。これにより、話題が導入される部分ではサ(↑↓)で聞き手を割り込ませずにターンを確保し、話を続けている間はナ(↗)で相手を引きつける、といったことが行われていると指摘している。

2.3. 問題のありか

2.1 節で見たように、伝統的な関西方言において、間投助詞サは使用されていなかった。しかし、高木(2000)が指摘したように、1990年代の関西若年層においては、ナが中心的に用いられながらもサの受容という現象が見られる。また高木は、これらの若年層が、サを「東京のことば」と認識しながら、自分でも気付かないうちにサを普段の会話に取り込み、使用していると述べている。

2020年現在の関西若年層においても、サとナの両方の使用が見られるが、その使用実態は高木(2000)とは異なっている点も多い。高木の指摘では、ナを中心に用いつつ、ナと機能を棲み分ける形でサを受容しているという図式であったが、現在の若年層は、ナよりもサを中心に用いている。また、高木の指摘にあったような、サを「東京のことば」だとする意識も薄れており、逆に方言形ナのほうに「関西方言らしい」という意識が生まれているように思う。このように、サの使用が浸透したことに伴い、間投助詞サ・ナの用法やこれらの間投助詞に対する意識が変化したと考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究では間投助詞サとナを対比しながら、関西若年層における使用実態と使用意識について分析・考察を行う。具体的には、以下の点を明らかにしたい。

- (i) 関西若年層の実際の会話において、サとナがどのように使用され、機能を分けているのか。
- (ii) 関西若年層は、間投助詞サとナに対してどのような意識を持ち、また自らの使用状況についてどのように認識しているのか。
- (iii) サ・ナに対する意識の変化が、使用実態にどのような影響を与えているのか。
- (iv) 高木(2000)から現在に至るまでに、関西若年層の間投助詞の使用実態はどのように変化したのか。

5) 高木は、郡(1997b)の挙げた文末イントネーションを参考にしている。郡によれば、上昇下降調は「直前より一段高くした後で下げる」、疑問上昇調は「連続的上昇：どんどん高くする」イントネーションである。

3. 調査方法の検討と調査の概要

この節では、前節で提示した問題を明らかにするために実施する調査のデザインについて述べる。本研究では、関西若年層の間投助詞についての使用実態と意識をそれぞれ明らかにするため、2種類の調査を実施することとする。調査対象者は、高木（2000）にならい関西（滋賀、京都、大阪、奈良、兵庫）出身あるいは在住の若年層（19～24歳）とする。

まず、現在の関西若年層の会話における間投助詞の使用実態を明らかにするため、談話の録音調査を行う。間投助詞は主にカジュアルな会話に現れると推測されるため、友人や家族など、話者がリラックスした状態で会話できる相手を設定し、その相手との自由会話を録音する。

現在の関西若年層の間投助詞サとナに対する意識については、アンケート調査を実施する。間投助詞サとナを用いた例文をそれぞれ与え、1.自分がその表現を使うか、2.友人がその表現を使っていた場合どのような印象を持つかについて、調査対象者に自由記述をしてもらう。

3.1. 談話調査の概要

関西在住の若年層の自由会話を録音し、出現した間投助詞のうちサとナが使用された発話例を取り出し、その機能や使い分けについて分析を行う。文字化にあたっては、仮名・漢字を使用して行い、その談話例において注目すべき間投助詞を太字カタカナで示している。母音の伸ばしがある場合、その長さに関わらず「ー（長音記号）」を付している。また、（ ）内は話者以外の短い相槌を示し、{ } 内は非言語行動を示している。

調査対象者は関西（滋賀、京都、大阪、奈良、兵庫）出身あるいは在住の若年層（19～24歳）である。本調査の調査時期は2020年8月～9月である。なお、本稿の談話資料に付している談話IDは、はじめのアルファベットが本調査（M）か予備調査（P）かを表しており、その後ろの数字は通し番号である。話者IDについては、はじめのアルファベットが本調査（M）か予備調査（P）かを、ふたつめが性別（男性=M、女性=F）を表しており、その後ろの数字は通し番号である。

3.1.1. 予備調査資料について

談話分析の本調査に先立って、関西若年層のサ・ナの使用状況を確認するため、予備調査として関西若年層の5～20分程度の談話を5件収集した。調査時期は2019年12月～2020年2月である。予備調査の結果、談話分析にあたっては比較的長時間の談話が必要であること、少人数での会話が好ましいことが分かったため、これらを本調査のデザインに反映させた。本稿の分析調査においては、これらのデータは録音時間が短く分析に不適切なため取り扱わないが、談話例についてのみ例示する場合がある。以下表1は予備調査で収集した談話の詳細である。

[表 1 予備調査資料の詳細]

談話 ID	収録時間*	録音日	インフォーマント	参加者
P1	22'06	2019 年 12 月 29 日	PF1(20 歳、女性) PF2(19 歳、女性)	PF1、PF2、 父母(ともに関西方言話者)
P2	13'40	2020 年 2 月 19 日	PF3(21 歳、女性)	PF3、 同年代の友人(標準語話者)
P3	5'00	2020 年 2 月 11 日	PM4(21 歳、男性)	PM4、 同年代の友人(標準語話者)
P4	9'11	2020 年 2 月 6 日	PM5(21 歳、男性)	PM5、父親(関西方言話者)
P5	9'47	2020 年 2 月 10 日	PM6(22 歳、男性)	PM6、母親

*収録時間は「分'秒」で表している。

3.1.2. 本調査インフォーマント

インフォーマントはいずれも関西（大阪、兵庫、京都）在住の若年層の男女 4 名である。以下にインフォーマントの生年、年齢、性別、出身地、居住歴を示す。なお、以下の情報はすべて録音当時のものである。

[表 2 本調査インフォーマント情報]

ID	生年	年齢	性別	出身地	居住歴
MF1	1999 年	21 歳	女	大阪府大阪市	0 歳～現在 大阪府大阪市
MF2	1998 年	21 歳	女	兵庫県神戸市	0 歳～現在 兵庫県神戸市
MF3	1998 年	21 歳	女	大阪府河内長野市	0 歳～15 歳 大阪府河内長野市 15 歳～現在 兵庫県神戸市
PM6	1998 年	22 歳	男	京都府八幡市	0 歳～現在 京都府八幡市

3.1.3. 本稿で扱う談話資料

本稿で分析調査を行った談話資料は 4 件であり、いずれも 2020 年 7 月～8 月に収集した 50 分～1 時間半程度のものである。談話はすべて参加者同士の自由会話であり、事前に了承を得て録音を行っている。談話資料 4 件の詳細は以下のとおりである。

[表 3 本調査談話資料の詳細]

談話 ID	収録時間*	録音日	参加者
M1	01'04'10	2020 年 7 月 15 日	MF1、筆者 ⁶⁾
M2	52'21	2020 年 7 月 30 日	MF2、筆者
M3	01'19'26	2020 年 8 月 8 日	MF3、筆者
M4	01'32'06	2020 年 7 月 23 日	PM6、母親・祖母(ともに関西方言話者)

*収録時間は「時'分'秒」で表している。

6) 筆者は神奈川県横浜市の出身であり、居住歴は以下の通りである。
1999 年生まれ。0-4：神奈川県横浜市、4-12：広島県広島市、12-現在：兵庫県神戸市

3.2. 意識調査の概要

間投助詞サとナそれぞれに対する使用意識や印象を尋ねる目的で、関西（滋賀、京都、大阪、奈良、兵庫）出身あるいは在住の若年層（19～24 歳）を対象に、アンケート調査を実施した。調査時期は、2020 年 9 月である。Google フォーム⁷⁾でアンケートを作成し、関西出身あるいは在住の大学生に配布し回答を得た。質問項目は以下の 8 項目である。

① 年齢
② 性別
③ 母方言
④ 現在主に使用する方言
⑤ 自分が関西弁を話しているとき、間投助詞サを使用するか
⑥ 友人が間投助詞サを使用したとき、どのような印象を持つか（自由記述）
⑦ 自分が関西弁を話しているとき、間投助詞ナを使用するか
⑧ 友人が間投助詞ナを使用したとき、どのような印象を持つか（自由記述）

質問③・④は、回答者が関西方言生え抜きであることを確認するための設問である。質問⑥・⑧については、回答者に以下の例文を与え、次のような言葉を友人が使用したとき、どのような印象を持つかという質問を行った。特に印象を持たない場合は、特になしと記入するように指示している。

(5) [友人の発話として]「昨日サ、雨降とったから道めっちゃ渋滞しとってサ、時間に遅れてしまっせん。」 (質問⑥)

(6) [友人の発話として]「昨日ナ、雨降とったから道めっちゃ渋滞しとってナ、時間に遅れてしまっせん。」 (質問⑧)

アンケート調査では、19 歳～22 歳の男女 76 名から回答を得た。この内、関西方言生え抜きでない者を除いた 68 名の回答を本研究の分析対象とした。以下に回答者 68 名の年齢と性別の詳細を表 4 として示す。回答者は全員、母方言（質問③）と現在使用している方言（質問④）についての回答が共に関西方言である。意識調査の結果については 6 節で扱う。

[表 4 アンケート回答者の内訳（年齢・性別）]

年齢	男性	女性	回答しない	計（人）
22 歳	—	3	—	3
21 歳	8	22	1	31
20 歳	6	14	—	20
19 歳	1	13	—	14
計（人）	15	52	1	68

7) Google が提供している、オンライン上でアンケートやテストを作成してほかのユーザーに送信できるサービス。

4. 分析の方法

本節では、本研究の談話調査において分析対象とする「間投助詞」の認定方法について論じる。まず 4.1 節で間投助詞と終助詞の区別について論じ、4.2 節で間投助詞ナが不自然となる文脈があることについて触れる。その後、4.3 節で本研究における分析の枠組みについて述べる。

4.1. 間投助詞と終助詞の区別

間投助詞と終助詞は、同じはたらきの助詞であるとして区別しない立場を取る者もいる（森田 2007・立部 2014 など）が、本稿では両者を区別して考える。以下にその根拠を述べる。

大江（2018）は、間投助詞と終助詞の統語的地位に言及し、両者の違いを示している。具体的には、終助詞が引用節以外の従属節には現れることができないのに対し、間投助詞は節の従属度に制約されず出現することができる点を指摘している。

(7) ??勉強をしなかった {ネ／サ} から、試験に落ちたんだ。

(8) 勉強を {ネ／サ} しなかったから、試験に落ちたんだ。

[大江（2018）より引用]

このように、間投助詞と終助詞の間には統語的な違いが見られる。また、関西方言においては、助詞サは終助詞として使用できない。

(9) こないだ旅行行ったとき {サ／ナ}、これ食べた {*サ／ナ}。

(10) さっきスーパー行ったけど {サ／ナ}、かぼちゃは売ってなかったん {*サ／ナ}。

(11) 勉強しながら {サ／ナ}、テレビ見てたら {サ／ナ}、集中できひん {*サ／ナ}。

[筆者の作例]

上の例文において、下線部は間投助詞（従属節に出現できるため）、二重下線部は終助詞となる。間投助詞としてはサとナの両方が使用できるのに対し、終助詞としてはナを使用することはできるが、サは使用できない。このような違いから、間投助詞と終助詞を同じ助詞と見なすことは難しい。関西方言におけるサとナの比較をするためには、ナを間投助詞と終助詞に区別する必要がある。

以上のことから、本稿においては間投助詞と終助詞を区別する立場を取る。間投助詞の認定基準については 4.3 節で詳しく述べる。

4.2. 間投助詞ナが不自然になる文脈

前節において、本稿では間投助詞と終助詞を区別することを述べたが、間投助詞に分類される助詞の中でも、方言形ナが不自然になる文脈がある。生天目（2006）は標準語における「ね」と「さ」の比較から、「ね」が質問文において不自然になりやすいことを指摘し、Goffman（1981）が提唱した footing の枠組みから「ね」が持つ機能について分析している。生天目によれば、「ね」と「さ」では話し手がターンを保持する機能を持つことは共通であるが、

「ね」は聞き手を“audience”⁸⁾として扱うという伝達態度を標示する機能をもつ。その機能が問いかけの発話における「ね」の不自然さをもたらしていると結論付けている。また、大江(2018)は間投助詞同士の対立に言及し、間投助詞をネ type (ネ、ナ⁹⁾、ノ)とサ type (サ、ヨ)の2つに大きく分けることができると主張している。また生天目(2006)が問いかけの発話として挙げた「情報要求」「同意要求」について、ネ type に分類される間投助詞はこうした問いかけの伝達態度を含む発話では不自然になると指摘している。

大江が指摘している、「情報要求」「確認要求」の文脈ではネ type (ネ、ナ、ノ)の使用が不自然になるという現象は、関西方言のナにも言えることである。

(12) これって {?ネ/?ナ/?ノ/サ/?ヨ}、誰の絵 ({だ/じゃ}) ?

(13) これって {?ネ/?ナ/?ノ/サ/ヨ}、ピカソの絵 {だ/じゃ} よ {ね/な}。

(14) これって {サ/?ナ}、誰の絵なん?

(15) これって {サ/?ナ}、ピカソの絵やんな。

[(12) (13) は大江より引用¹⁰⁾、(14) (15) は大江を参考にした筆者の作例¹¹⁾]

(14) (15) のように、関西方言における「情報要求」「確認要求」の文脈においても、東京語形サは用いることができる一方で、方言形ナは不自然になる。

このように、サとナが入れ替わることができない文脈では、サとナのどちらを使用するかという選択は起こり得ない。このような「サとナが交替可能でない発話」は、「サとナの対比において使用実態を観察する」ことを目的とする本研究で扱うには不適切なため、分析対象から除外する。

4.3. 分析の枠組み

前節で述べた通り、本稿では間投助詞と終助詞を区別した上で、間投助詞について分析を行う。また、サとナが交替できない文脈での発話は分析対象から除外する。まず、間投助詞と終助詞を区別するために、間投助詞が文節末に比較的自由に付くという点を踏まえ(4.1節参照)、以下の条件①～③を設定し、このいずれかに当てはまるものを間投助詞と認定した。

① 名詞、接続詞、副詞、感動詞に付く。

(例) この店 {サ/ナ}、だから {サ/ナ}、なんか {サ/ナ}

② 格助詞、副助詞、接続助詞に付く。

(例) あの子が {サ/ナ}、それは {サ/ナ}、思ったけど {サ/ナ}

8) Goffman (1981) は、“audience”を「話し手の言葉を理解するが直接応答はせず、相づちのみを行う聞き手」と定義している。

9) 大江(2018)の扱う「ナ」とは標準語であり、本稿で言及する関西方言形「ナ」とは異なるものとする。

10) 大江は35名の日本語母語話者の協力を得て実施した質問紙調査の結果に基づいて例文の自然性判断を行っている。調査では各例文を「0」(不自然)から「3」(自然)の4段階で判断してもらい、その平均値に応じて例文冒頭に記号を付している(0以上1未満:

「??」、1以上2未満:「?」、2以上3以下:記号なし)。

11) (14) (15) の例文については、筆者が不自然だと感じる例文に「?」を付している。

- ③ 動詞・形容詞・形容動詞・助動詞の連用形と仮定形、および体言を修飾する連体終止形に付く。

(例) きれいに {サ／ナ}、欲しくて {サ／ナ}、行ったら {サ／ナ}、
今度見る {サ／ナ} 映画やねんけど…

また、サとナの「選択」に焦点を当てるため、条件④を設定した（4.2 節も参照）。

- ④ ①～③のいずれかに当てはまるもののうち、サとナが交替可能ではないものについては除外する。

5. 談話調査

本節では、収集された実際の談話例から、間投助詞サとナの使用実態を分析する。まず 5.1 節でサとナの談話内での出現数を比較する。次に 5.2 節で助詞の前接語を観察し、5.3 節にかけてサとナの使われ方の違いを分析する。5.4 節では、サとナが談話において異なるはたらきをする例について考察する。

5.1. サとナの出現数

談話に出現した間投助詞サ・ナの数をインフォーマント別に集計したものが以下の表 5 である。

[表 5 間投助詞別の出現数]

	サ	ナ	計
MF1	79	2	81
MF2	74	9	83
MF3	126	13	139
PM6	25	7	32
計	304	31	335

表 5 によってサとナの出現数を比較すると、いずれのインフォーマントにおいてもサをナより多く使用している。したがって、現在の関西若年層のカジュアルな会話においては、ナよりもサが中心的に用いられていると推測できる。インフォーマントの中では、PM6 の間投助詞自体の使用数が極端に少ないが、これは PM6 の談話のみ会話参加者が 3 人であることが関係しているものと思われる。談話の中で PM6 は基本的に聞き手役に回っており、自らターンを取って話す場面が少なかったため、ほかのインフォーマントに比べ間投助詞の使用も少なくなったと考えられる。

5.2. 前接語の違い

表 6 は、収集したすべての談話の中から、サ・ナそれぞれの前接語を分類したものである。

[表 6 助詞サ・ナに前接した品詞とその数（サ降順）]

品詞	サ使用数	ナ使用数
活用語テ形	69	—
接続助詞（から、けど、し等）	59	14
格助詞（が、の、に等）	48	2
副助詞（は、も、とか等）	37	2
副詞（なんか、もし等）	34	8
活用語仮定形（たら、なら）	17	2
接続詞（だって、でも、そしたら等）	17	—
名詞	16	1
連体詞	4	1
活用語連体形	2	—
活用語連用形	1	—
感動詞	—	1

数字は実数、「—」は用例がなかったことを表す。

サとナを比較すると、最も目立つのがテ形の有無（サ 69 例、ナ 0 例）である。これは、発話者がテ形を用いるとき、その話者のターンがその後も続くケースが多いことが関係していると考えられる。すなわち、「～してサ、…」というように、話者が相手を割り込ませずに話し続ける場合、すなわち「話し手のターン維持」には専らサが用いられていることを示唆している（→5.2.1 節）。

ナはそれ自体の出現数が少ないにもかかわらず、前接語に偏りが見られる。ナの使用例 31 例中で約半数を占める 14 例が、接続助詞との接続例であった。サについても、接続助詞が前接している例が多く見られるが、サとナでは、接続助詞が前接した後の談話展開が異なるという特徴がみられる（→5.2.2 節）。

ナについては、次いで多いのが副詞だが、全 8 例のうち 4 例が「なんか」との接続であった。そのほか、従属節を作ることが多いという面で接続助詞と性格が似ている「たら」「なら」との接続も見られた。

5.2.1. サの連続使用と無標化

前節で「テ形＋サ」の形が非常に多いことを指摘したが、この点はサの連続使用が多いことと関係していると思われる。高木（2000）は「サーの連続使用は少ない」と述べているが、本研究で収集した談話の中にはサの連続使用がかなり見られる。そのうちの 1 例を以下に示す。

(16) 【MM4 が友人に数学の質問をされた話】

MM4: 今日 ナ 健太からライン来て サー 数学出来る？ってライン来て サー できるよって言ったら サー これ わかる？って言われて 送られてきたんが サー な

んか学期末レポートみたいな 学期末試験みたいな (母親：うん) 送られてきてサ (母親：うん) でなんか 全然わからへんかってんな その 経済学部やからサ 経済学部用語いっぱいみたいな [M4]

(16) は、話し手自身の体験したことを他者に語っている場面である。話し手はサを連続して使用することで、「自分の話がまだ続いていること」を聞き手に示し、ターンを維持しようとしているといえる。この発話では、前節で指摘したような「テ形+サ」の形が3回出現している。このような「テ形+サ」の形が談話において多く見られるのは、発話者がテ形を用いるとき、その話者のターンがその後も続くケースが多く、サが「ターン維持」を目的として連続的に使用されることが多いからである。また、サの連続使用を行っている話し手に対しては、聞き手が短い相槌(「うん」等)を行っている発話例が多く見られ、話し手の「ターン維持」の意図が聞き手にも正確に伝わっている様子が読み取れる。

サが「ターン維持」の目的で連続的に使用されるようになったのは、サが関西方言話者の間で浸透していくにつれ、彼らの間でサが「東京ことば」から「無標のもの」となっていったからであると推測される。宇佐美(1999)は、間投用法が会話管理に寄与する基本的な機能として「話し手が自分のターン(発話の順番)を保持すること」を挙げている。現在の関西若年層にとってサが無標のものとなり¹²⁾、「間投助詞といえば『サ』」というような位置づけがなされているからこそ、間投助詞が基本的な機能としても「ターン維持」をサで行っていると考えられる。

サはテ形との接続例が多いと述べたものの、表6を見ると、テ形以外にも接続助詞や格助詞、副助詞、副詞など様々な要素に接続しているのが分かる。また、その出現位置も比較的自由である。一方、ナは連続使用の例がかなり少なく、出現する形や位置にも偏りが見られる。次節以降では、間投助詞ナの使用実態について考察する。

5.2.2. 「言い終わり」部分でのナの使用

ここでは、ナの出現しやすい形である「接続助詞+ナ」について考える。接続助詞の中では、サ・ナともに「けど」との接続例が多く見られた(サ20例、ナ5例)。しかし、サに付く場合とナに付く場合では、その後の談話展開が異なる場合が多い。具体的には、「けど+サ」という形では、話者のターンはそのまま維持されるのに対し、「けど+ナ」という形では、話者がその発話で自分のターンを終了することが多いのである。例として、同じインフォーマント(MF3)の2つの談話を以下に示す。

(17) 【レジ袋の有料化に伴うバイト先での出来事について】

MF3: なんか ここって有料ですか みたいな 聞かれるねやんか

筆者: うん いや どこも有料 {笑い}

⇒MF3: どこも! みたいな 7月頭に言われるならまだ分かるけどサ いまだにサ なんか 袋ご入用ですかって聞いたたら ここ有料ですかって言われて はいって言ったたら はあみたいな 待って待って どこで生活してるん 普段 みたいな {笑}

12) 関西若年層のこのような意識については、6.2.1節で詳しく述べる。

い}

筆者：わかるわかる {笑い}

[M3]

(18) 【企業の圧迫面接について】

筆者：メリットあるんかな あんまりさー 本音も引き出されへんし

MF3：うん

筆者：ストレス耐性を見たいだけなんかな

MF3：うん そうなんかなあ

筆者：効率悪くない？でも 一回分呼んでんのにさ ストレス耐性しか見れへんやんなんなら

⇒MF3：うーん ストレス耐性とか そんなん…なあ？ と思うけどナ

筆者：なんか A 社の なんか 企業説明会みたいな の 行ったときに … (以下筆者の発話が続く)

[M3]

これら2つの場面を比較すると、どちらも「けど+助詞」という形ではあるが、(17)はその後も発話者自身の発言が続く(直後に「いまだにサ」とサを重ねて使用することからも、発話者がターンを維持しようとしていることが分かる)のに対し、(18)の場合、MF3は「と思うけどナ」という発話で発言を終え、直後に筆者のナラティブが始まっている。

このような「けど」で言い終わる文について考察したものに、白川(1996)がある。白川は、従来「言いさし」と呼ばれてきたものを3種類に分類し、そのうち「形式上、後件が表現されておらず、後件を言わずに言い終えている」けれども、「後件を文脈情報から復元することができない」ものについて、「言い終わりのケド」と呼んでいる。

(19) 早苗「失礼します。会議が、もう始まるそうですけど……」

正樹「え？(と、時計を見る)あ……(忘れていたのだ)」

[白川(1996)より引用、下線も白川による]

白川は、このような「ケド」節は、主節の「省略」が行われているわけでも、主節の「言い残し」があるわけでもなく、主節を初めから持たないということを主張している。そしてそのような「ケド」節は、「言いさし」ではなくそこで言い終わっている文であると述べている。

方言形ナは、白川が指摘したような「言い終わりのケド」節、すなわち主節を持たず、そこで言い終わるような節に後続する例が多い。このように、ナが「言い終わり」部分に現れる現象は、「けど」以外の接続助詞(「から」「し」等)にも共通して観察することができる。

(20) 【大学に入ると専門的な学びをすることで学生の視点が多様になるという話】

MF2：この今までの 2 年間でさ まあ ちょっとずつ 専門の講義とか受けてる中で
そういう視点が

筆者：視点がね 自分の中で確立 まあ確立までいかんけど そういうのが染みついて
きてる ってことやもんな

MF2：すごいなーと思って

筆者：たしかに おもしろい 大学ってそういう 学びの場でもあるよな と思って
すごい 高校とかと全然違う

⇒MF2：高校は皆おんなじことやってるからナー

筆者：そうそうそうそう それでなんか 優劣つくけど 大学は ほんまに 自分が興味あることで なんか だからみんなさ 楽しそうやねん 結構 [M2]

(21) 【祖母が PM6 に大学での様子を尋ねている】

祖母：浩ちゃん〔PM6 のこと〕 友達も みんなまじめな人ばかりか？

⇒PM6：そんなことないよ 今日もだって なんだかんだ勉強しに行ったけど 15 時半から麻雀してたしナ

祖母：{笑い} へえー 麻雀ってかいな

PM6：うん 持って行って その おじい〔おじいちゃん〕の 持って行ったんや [M4]

(20) (21) でも、「からナー」「しナ」の後、話者は相手にターンを渡しており、そこで言い終わっている。

このようなナは、「けど」「から」「し」といった接続助詞に接続しているという点では（本稿で研究対象とした）間投助詞である。しかし、運用面から見ると、後件が表現されない「言い終わり」の接続助詞に付いていることから、文の終わりを作っていることが多い。そのため、終助詞のようなはたらきをしているようにも見える。この点でナは、従来の「間投助詞らしい」はたらき、すなわち「ターンを確保する」はたらきとは異なる使われ方をするようになっていると言える。むろん、そのようなナが完全に使用されなくなったわけではない。しかし、現在の関西若年層の間では、「間投助詞らしい」ナの使用が徐々に衰退し始めていると言えるであろう。

5.3. 「話題の切り出し」部分でのナの使用

前節でも述べたように、「間投助詞らしい」ナの使用の衰退はみられるものの、そのようなナが完全に使用されなくなったわけではない。実際の談話例からも、数自体は少ないものの「言い終わり」ではない部分でのナの使用も観察できる。しかし、そのような間投助詞ナについても、談話全体の流れを見ると、ナが使用される部分に偏りがあるように思われる。それは、「話題の切り出し」部分でのナの使用である。以下の談話例を参照されたい。

(22) 【PM6 が友人の家でチーズダッカルビを作った話】

PM6：食べたことないけど作ってん すごくない？

母親：{笑い} すごい 美味しかったやろ？

PM6：うん

母親：チーズが好きな人が 美味しいねん

⇒PM6：なんかコチュジャンをナー（ノ） 買ってんけどサー（↑↓） んな 男の一人暮らしにコチュジャンなんて買ってもサー（↑↓） んなん 食わへんやん いい {笑い} いらんやん まあしゃあないかあってってなって 買ったんやけどサー（↑↓） なんか キムチ キムチの素 ってあるやん あれかコチュジャンかどっちかで作れるとか言われてサー（↑↓） コチュジャン買ってんけどサー（↑↓） キムチの素ってなに？ コチュジャンと変わらん？ [P5]

(22) では、PM6 がまず「コチュジャンをナー」をいう発話でターンを開始した後、サを連続的に使用することでターン維持を行っている。このように、ナは新たに話題を切り出す場面で使用される場合が多い。これは、高木 (2000) で指摘されたサの役割をナが担うようになったとも言える。また、ナに疑問上昇調、サに上昇下降調のイントネーションを伴っていることから、現在の若年層は、話題の導入部分においてナ (ノ) で相手を引きつけた後、話を続けている間はサ (↑↓) で相手を割り込ませないようにしていると考えられる。関西方言における間投助詞ナは、このような「話題の切り出し」というひとつの役割を担い、間投助詞として生き残っている。

5.4. 談話におけるサとナのはたらきの違い

この節では、サとナが文法的には入れ替え可能でも、入れ替えると話者の発話に対する態度が変わってしまうような談話例があることを指摘する。

5.4.1. 不満を述べる発話

東京語形サは、不満を述べたてのような発話において、話者の感情を表出する効果がある。

(23) 【PF2 が、始めたばかりのバイトのシフトについて不満を述べている】

PF1：明日もずっとバイトなん めっちゃ勤しむやん

《中略》

PF1：お姉ちゃん もう年末年始働くん嫌やわーと思って シフト入れんかった

PF2：入ってくれって言われたんや シフト

PF1：1月の2日 募集されとったけど

⇒PF2：そやのにこんなに私シフト入れてんのにサ 年末年始 せやのにこないだサー 店長がまた来てサー 「1日は…どうしても無理ですか」「…はい」みたいな もうこれ以上いれる？私 みたいな

PF1：適当に断らへんからや 適当に断らへんから 暇な人やと思われてんちゃうん
[P1]

(24) 【MF3 がバイト先 X での出来事を話している】

MF3：1回サー なんか X めっちゃ 7時半開店とか やねんよ モーニングやってるから そしたらサー オールで飲んでたサー なんか なんやろなあ 大学生新入社員くらいかなあ ぐらいの歳の 5人組が 迷い込んできて {笑い} 《中略》 朝からビール5本開けられてサー モーニングや言うてんのにサー スパゲッティとか めっちゃ頼まれてサー 店長もサー まあ作れるから別にいいよーって言うけどサー めっちゃだるいねやんかー 何本ビール飲むんって でもなんか 常連さんとか 徐々に来だしたらサ ドン引きするやん [M3]

(23) や (24) のサをナに置き換えると、サを使った時のような「不満げ」なニュアンスが和らぐ。このように、サには話者の「不満」や「不快感」といった感情を表出するような効果がある。ただし、このようなサの機能は、常にはたらくわけではない。例えば、5.2.1 節で上げた用例 (16) の場合では、サをナに置き換えても、発話のニュアンスにほとんど差は

ない。

5.4.2. 同意を求める発話

方言形ナには、相手に同意を求めたり、相手も同意見であることを確認しながら話すような効果がある。

(25) 【PF3 の弟の大学受験について】

PF3：で それで落ちちゃって 浪人することになって

友人：うわー かわいそう

⇒PF3：そう ま 別に 一浪ぐらいナ (友人：まあそうだよ) 全然 全然 そんな
なん なんのあれでもないけどナ

友人：阪大なんてゴロゴロいるでしょ [P2]

(25) では、PF3 がナを用いることで、その時点までの発話内容について聞き手と自分が同意見であることを確認するような効果が生まれている。事実、聞き手である友人も PF3 の「一浪ぐらいナ」という発話の直後に、話し手に同調する態度を示すような相槌を打っている。一方、(25) におけるナをサに置き換えると、単に自らの意見を述べているだけのような発話になる。

6. 間投助詞サとナに対する意識調査

本節では、関西若年層の間投助詞サとナに対する意識について、アンケート調査の結果をもとに考察する。まず 6.1 節でアンケート調査結果を見た後、6.2 節で考察を行う。

6.1. アンケート調査結果

6.1.1. 間投助詞サに対する意識

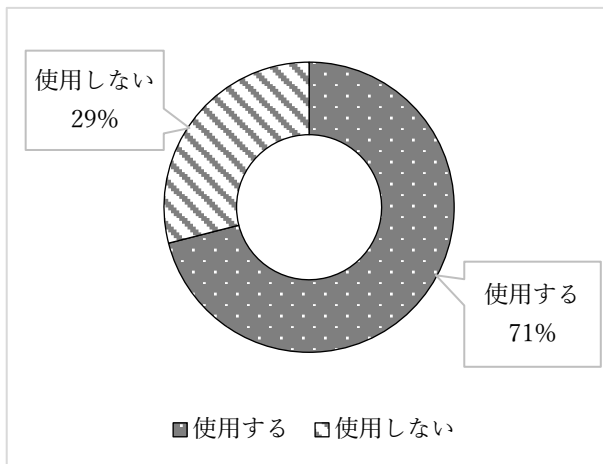


図 1 サを自分が使用するか (質問⑤)

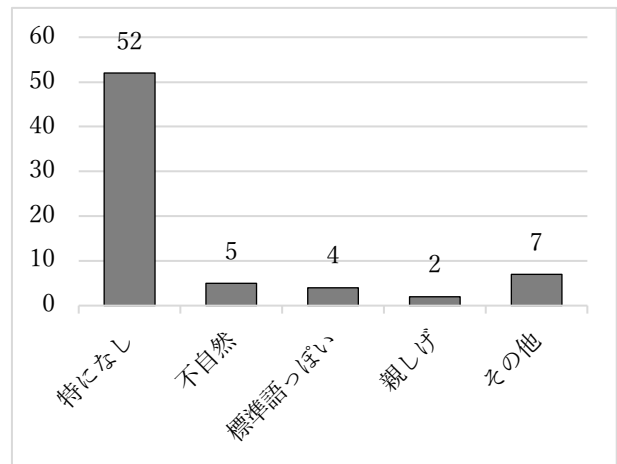


図 2 サを友人が使用した時の印象 (質問⑥)

図 1 からわかるように、現在の関西若年層のうち 70 パーセント程度が、間投助詞サを自分で使用すると認識している。友人が使用した時の印象 (図 2) については、「特になし」の回答が最も多く、回答者の 74 パーセントを占めた。一方、「不自然・違和感がある」とい

う回答が 5 件、「標準語っぽい」という回答が 4 件得られたため、現在の関西若年層でも「サ」が標準語であると認識している人はわずかながらいるようである。その他の回答としては、「さばさばしている」「とげとげしい」「もったいぶっている」などがあつた。

6.1.2. 間投助詞ナに対する意識

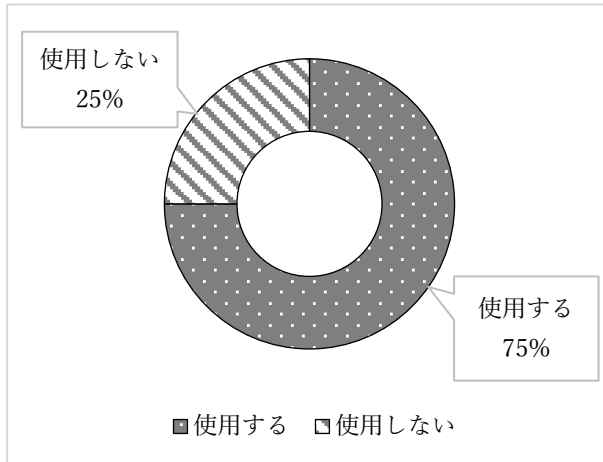


図3 ナを自分が使用するか（質問⑦）

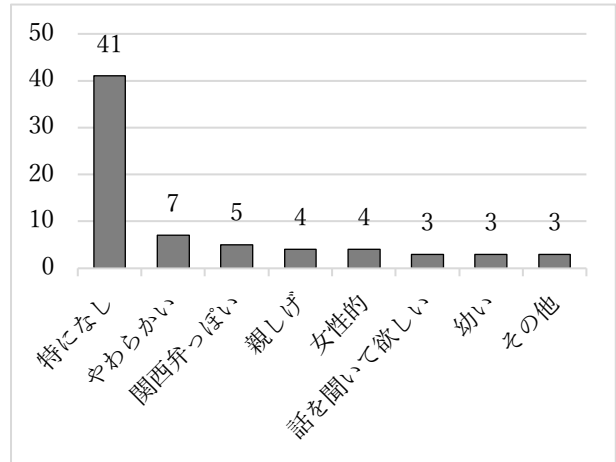


図4 ナを友人が使用した時の印象（質問⑧）

図3を見ると、ナを自分が使用するかという点については、サよりも若干増加したが、サとナの使用意識にそれほど差は見られない。一方、友人が使用した時の印象（図4）については、「特になし」と答えた人がサに比べて減少した。挙げられた印象で最も多かったのは「やわらかい・のんびりした感じ」で7件、次いで「関西弁っぽい」が5件あつた。また「親しげ」「女性的」が4件ずつあり、「相手に話を聞いて欲しいという気持ちを感じる」という回答が3件見られた。

6.2. 考察

アンケート調査の結果から、サとナに共通して言えることは、70 パーセント以上の人が間投助詞サもしくはナを「使用する」と答えている点である。このことから、現在の関西若年層は、意識の中ではサもナも同様に使用できる表現であると認識していることが分かる。しかし、談話調査から明らかになった通り、実態としてはサを中心的に用いており、サとナを同等に使用しているとは言い難い。

以下 6.2.1 節では、前節の調査結果を踏まえ、アンケート調査と談話調査の結果の関係性について考察を行う。

6.2.1. 意識・印象と実態のかかわり

ここで、使用意識と印象の関係についてもう少し詳しく観察する。表7・表8は、「自分が使用するかどうか（質問⑤・⑦）」と「各間投助詞に対する印象（質問⑥・⑧）」の回答者数について「自分で使用する・印象特になし」「自分で使用する・印象あり」「自分で使用しない・印象特になし」「自分で使用しない・印象あり」の4パターンに分類したものである。

[表 7 サ使用意識と印象の回答者数内訳]

	サ印象なし	サ印象あり	計
サ使用	41	7	48
サ不使用	7	13	20
計	48	20	68

数字は実数（人）

[表 8 ナ使用意識と印象の回答者数内訳]

	ナ印象なし	ナ印象あり	計
ナ使用	31	20	51
ナ不使用	9	8	17
計	40	28	68

数字は実数（人）

それぞれの間投助詞について、「使用する」と回答した人の数に大きく差はない（サ 48 名、ナ 51 名）が、各間投助詞に対する印象と関連付けると、その内訳に違いが見られる。ナを「使用する」と答えた人のうち、ナに何らかの印象を回答した人は 20 名だったのに対し、サを「使用する」と答えた人のうち、サに何らかの印象を回答した人は 7 名であった（表中の網掛部分）。すなわち、サを「使用する」と認識している人はサに特別な印象を持っていない人が多い、つまりサを無標のものとして捉えている人が多いということになる。このようなサの無標化については 5.2.1 節でも指摘したが、この「サ＝デフォルトの間投助詞」とする認識の広がり、実態としてサが中心的に使われていることと関係していると考えられる。

次に、各間投助詞を「使用しない」と答えた人の欄を見ると、ナについては「印象あり（8 名）」と「印象なし（9 名）」がほぼ同数であるが、サについては「印象あり（13 名）」が「印象なし（7 名）」より多くなっている。この点について、「印象あり」と答えた人の回答を詳しく見る。以下表 9 は、間投助詞サ・ナに対して挙げられた印象（1 件以下のものは省略）と、その印象を挙げた回答者自身の使用／不使用についてまとめたものである。

[表 9 間投助詞に対する印象と使用／不使用の回答数]

サの印象	サ使用	サ不使用	ナの印象	ナ使用	ナ不使用
不自然・違和感	—	5	やわらかい	5	2
標準語っぽい	1	3	関西弁っぽい	2	3
親しげ	2	—	親しげ	4	—
			女性的	1	3
			幼い	3	—
			話を聞いて欲しい	3	—

間投助詞サに対する印象では、「特になし」以外の回答で最も多かった「不自然・違和感がある」という回答をした 5 名は、全員サを使用しないと答えた。また、次いで多い「標準語っぽい」と回答した 4 名のうち、3 名がサを使用しないと答えた。このように、サに対して何らかの印象を持っている人は、意識的にサを使用していない人が多いようである。サに対して挙げられた印象を見ると、自分では使わない《ソトのことば》として捉えている人が

多いように思われる。すなわち、「《ソトのことば》だから使わない」という意識を持っていると考えられる。

一方、ナを使った友人に対する印象では、「特になし」以外の回答で最も多かった「やわらかい・のんびりした感じ」と答えた7名のうち、5名が自分でもナを使用すると回答し、そのほか「親しげ」「幼い」「話を聞いて欲しいという気持ちを感じる」と答えた回答者についても、全員が自分でもナを使用すると回答している。サの場合と異なり、ナに何らかの印象を持っている人は、ナを使用すると回答した人が多いことが分かる。

このような意識の違いが使用実態に与える影響については、より多くの間投助詞ナの使用例を分析する必要があると感じるが、間投助詞ナは、このような「やわらかさ」「幼さ」「話を聞いて欲しい気持ち」などを話者が表現したいときに選択される可能性が考えられる。

7. 関西若年層における間投助詞使用実態の変化

ここまで見てきたように、高木（2000）で述べられている1990年代の実態と比べ、2020年現在の関西若年層では間投助詞の使用実態に違いが見られる。談話調査から見た使用実態、アンケート調査から見た使用意識について、大きく以下の3点が指摘できる。

1990年代		2020年
ナを中心的に使用（ナでターン確保）	⇔	サを中心的に使用（サでターン確保）
サは「新たな話題が導入される」部分に用いられる	⇔	ナは「言い終わり」と「新たな話題が導入される」部分に用いられる
サは「東京ことば」であり、自分では使用しないという意識	⇔	サはデフォルトの間投助詞であり、自分でも使用するという意識

高木（2000）は、分析に用いた談話資料の中では、サの使用例は456例、ナの使用例は1129例得られたとしている。また、ナの連続使用が多いことを指摘し、サは話題が新たに導入される部分で用いられ、その話題の中ではナでターンを確保する、というように役割を分担していると述べている。一方、本研究で使用した談話資料では、サの使用例は304例、ナの使用例は31例であり、サの使用数がかなり多い。また、話者のターン維持を目的としたサの連続使用が多く見られる。このように、1990年代から2020年現在にかけて、関西若年層の間投助詞の使用という面においてサがナに取って代わったことは明らかである。

また出現位置という面では、先に述べたように、高木はサが話題の導入部分に使用されるとしているが、5.2.2節で論じた通り、現在では間投助詞ナが「言い終わり」節に接続する例が多く見られる。「言い終わり」節を作っているナは、従来の「ターンを確保する」間投助詞のはたらきとは異なり、聞き手にターンを渡す場合が多い。この点で、関西若年層の会話において「間投助詞らしい」ナの使用の衰退が見られる。逆に、「間投助詞らしい」ナの使用としては、「話題の切り出し」部分に多く見られ、かつてサが担っていた役割をナが担うようになったというような変化が窺える。

関西若年層の意識についても変化が見られる。高木は、関西若年層の間ではサが「東京の

ことば」であり、「自分では使わないもの」と認識されていることを指摘した。しかし現在では、サを「東京ことば」とする意識は薄れ、むしろサを「デフォルトの間投助詞」として自らの関西方言に取り込んでしまっている。

以上を踏まえれば、1990年代から現在に至るまでに、関西若年層の間で間投助詞サに対する意識の変化（「東京ことば」から「デフォルトの間投助詞」へ）が起こり、使用実態としてもサがナに取って代わり、中心的に用いられるようになったと結論付けることができる。

8. まとめと今後の課題

関西若年層の間投助詞の使用実態について、本稿で明らかになった点は次の通りである。

- (I) 2020年現在の関西若年層のカジュアルな会話においては、間投助詞サが中心的に用いられている。特にサは「ターン維持」の目的で様々な要素に接続し、連続的に使用される例が多い。
- (II) 間投助詞ナは出現位置に偏りがある。ナは、「言い終わり」の文に多く表れ、「間投助詞らしい」ナの使用の衰退が見られる。また、「間投助詞らしい」使用としては「話題の切り出し」部分に現れやすい。
- (III) サとナはそれぞれ「不満の表出」と「同意要求」という異なるはたらきを持っている。
- (IV) 関西若年層の意識の中では、サはデフォルトの間投助詞であるとする認識が広がっており、それに伴い使用実態としてもサがナに取って代わり、中心的に使用されるようになった。

本稿では、談話において間投助詞が伴うイントネーションとの関係からの考察を十分に行うことができなかった。高木(2000)もイントネーションと紐づけて論じているように、談話における間投助詞とイントネーションは深く関係していると考えられる。また、助詞サ・ナが持つ文法的意味と関西方言における間投助詞サ・ナのはたらきとの関連について追究すれば、より両者の対立が明確になるであろう。これらの点については、今後の課題としたい。

参考文献

- 宇佐美まゆみ(1999)『『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス』現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房。
- 大江元貴(2018)「間投助詞の位置づけの再検討」『語用論研究』19: 90-99, 日本語用論学会。
- 郡史郎(1997a)「大阪方言の特色」平山輝男・大島一郎・大野真男・久野真・久野マリ子・杉山孝夫編『日本のことばシリーズ 27 大阪府のことば』明治書院。
- 郡史郎(1997b)「日本語のイントネーション型と機能」杉藤美代子監修、国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫編『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂。
- 国立国語研究所(2006)『方言文法全国地図 第6集』第343~348図
- <https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-volume/GAJ-vol6.pdf> (参照 2020-12-

14).

白川博之 (1996) 「『ケド』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』6: 9-17.

高木千恵 (2000) 「関西における間投助詞 『サー』の使用実態」『地域言語』12: 13-27, 地域言語研究会.

立部文崇 (2014) 「間投助詞『ね』と終助詞『ね』の区別に関する考察」『徳山大学論叢』79: 1-13.

生天目知美 (2006) 「間投用法『ね』が標示する聞き手への伝達態度」『筑波応用言語学研究』13: 57-70.

森田笑 (2007) 「終助詞・間投助詞の区別は必要か」『言語』36(3): 44-52, 大修館書店.

Goffman, E. (1981) *Forms of Talk*. Oxford: Blackwell.

しばもと あやの (大阪大学卒業生)